

低年齢の子どもの英会話学習に関する調査

執筆者 KDDI 総合研究所 フューチャーデザイン 1 部門 宮脇 景子

▼記事のポイント

<サマリー>

グローバル化の進展や、2020 年より始まる新学習指導要領（教育改革）を背景として、これからの日本社会では、英会話学習がこれまで以上に重視され、「低年齢の子ども（※）に対する英会話学習需要」が強まると予想される。

本レポートでは、今後増加が見込まれる「低年齢の子どもに英会話を習わせる生活者」を対象にインタビュー調査を実施し、英会話学習の開始および継続時におけるペインポイント等について分析した結果について報告する。

調査対象者は英会話の必要性を感じ、低年齢の子どもに英会話を習得させたいと考え、行動していた。英会話学習開始を後押しするプラス要因として、英会話学校の立地や授業のスケジュールが希望に合うこと、体験学習の印象がよいこと、授業の内容が子どもに合っていることなどが挙げられた。一方、知りたい内容が英会話学校のホームページ等ですぐに確認できないこと、口コミ情報が少ないことなどが英会話学習開始時におけるマイナス要因であった。子どもの英会話学習を継続する上でのペインポイントとして、英会話学校までの送迎、家庭学習のサポートなど親にかかる負担や、子どもの英会話の学習成果が見えない事などが抽出された。親が就労している場合や、子どもの年齢に依り発生しているペインポイントもあった。

調査対象者は、「英会話を習わせることは、子どもにとって必要なこと」と認識し、英会話学習に纏わるペインポイントを、何とか自身で解決・もしくは解決できずやり過ぎながら継続していた。子どもの英会話学習をスムーズに開始・継続できるようにするためにはどのようなサポートが必要か考察する。

（※）本レポートにおいて、「低年齢の子ども」とは、小学校低学年まで（0-9 歳）の子どもと定義する。

<キーワード>

子ども 習い事 英会話 共働き 生活者のペインポイント

<地域>

日本

第1章 はじめに

調査の背景と目的

グローバル化の進展により、国際共通言語である英語によるコミュニケーション機会が増えており、日本人にとって英会話はますます重要なスキルになりつつある。2020年より順に始まる新学習指導要領により、日本の小・中・高等学校における英語教育は、より高度且つ実用的な内容に変わる。小学校では2020年4月より、従来5・6年生に実施している英語に慣れ親しむための「外国語活動」が、3・4年生に導入される。また5・6年生からは、教科として「英語」の授業が始まり、国語や算数などと同様に成績が付く科目になる。中学校・高等学校では、2021年4月より、英語の授業は原則全て英語で実施されるようになる。授業では、英語における四技能（五領域）、すなわち読む・書く・聞く・話す（会話、及び発表）それぞれの力を伸ばすように指導がなされる。また、学習指導要領の変更に伴い、2021年1月より大学入試センター試験に代わって始まる大学入学共通テスト等においても、英語の四技能全てが評価の対象となる。四技能評価は、現状の入学試験で実施されている方法で測ることが難しいことから、民間の英語能力測定試験（英検、TOEFL等）も活用されるようになる。このように、小・中・高等学校の英語学習、及び評価方法は、これまでのように「何を知っているか（単語など）」を問う詰込み型から、「何ができるか」までをも学力として評価する実用型に変化する動きが見られる。

英語の授業が小学生から導入される事や、大学受験において四技能（五領域）が評価対象になる事等の変化により、低年齢の子どもをもつ持つ生活者は、より子どもの英会話学習に関心を持つことが予想される。「低年齢の子どもの習い事として英会話を選択する生活者が増える」ことを今後起こり得る変化と捉え、我々は低年齢の子ども英会話学習の実態やペインポイント等を把握するための調査を実施した。本レポートでは、調査分析結果に加え、低年齢の子どもの英会話学習の促進・継続を支援するためにはどのようなサポートが必要か考察した。

第2章 予備調査（Webアンケート調査）

調査手法

低年齢の子どもにおける英会話学習の実施率などの市場ボリュームを把握することを目的として、「0-9歳の長子がいる女性」を対象に、Webアンケート調査を実施した。この調査は、次に行うインタビュー調査の対象者選定も兼ねている。インタビュー調査におけるリクルートが比較的容易であるため、今回調査においては回答者を女性に限定した。Webアンケート調査の概要を図表2-1に示す。

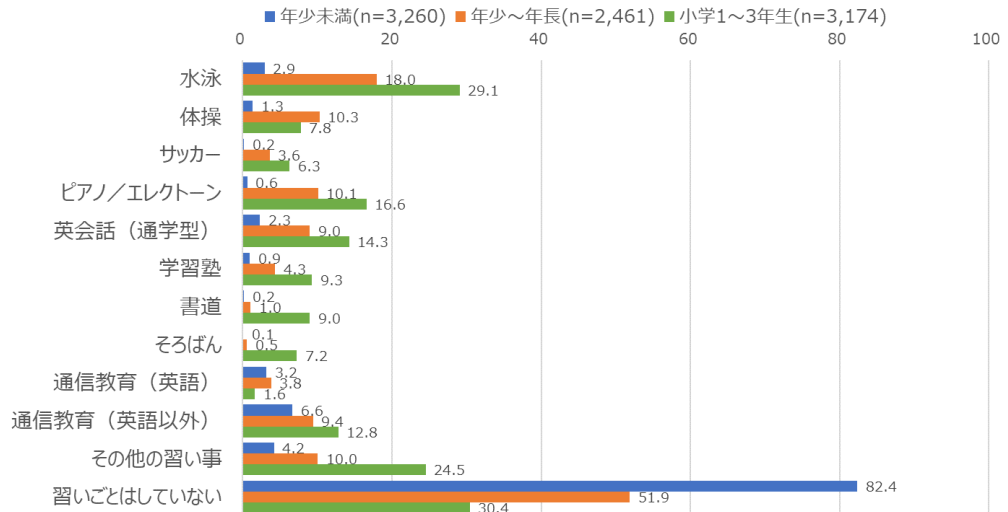
【図表2-1】 Webアンケート調査の概要

項目	内容
日程	2019年1月22日(火)～1月24日(木)
調査エリア	全国
調査対象者	外部調査会社のWebアンケートモニタ
対象者条件	0-9歳の長子がいる女性
サンプル数	8,895サンプル

調査結果

低年齢の子どもは、どのような習い事を行っているのだろうか。また英会話は、低年齢の子どもの習い事として現状どれ位のシェアを占めているのだろうか。低年齢の子どもの習い事の現状と、英会話学習の実施率を把握するため、Webアンケート調査にて「現在子どもに習わせている習い事」を聴取した結果を図表2-2に示す。集計は、子ども(長子)の年齢を「年少未満」、「年少～年長」、「小学1～3年生」の3区分に分けて実施した。

【図表2-2】 現在子どもに習わせている習い事(子どもの年齢区分別)



年少未満について、その他を除いて上位に挙げた習い事は「通信教育(英語以外)」(6.6%)、「通信教育(英語)」(3.2%)、「水泳」(2.9%)の順であった。「英会話(通学型)」は2.3%であった。全体の82.4%は習い事をしていなかった。

年少～年長について、その他を除いて上位に挙げた習い事は「水泳」(18.0%)、「体操」(10.3%)、「ピアノ/エレクトーン」(10.1%)の順であった。「英会話(通学型)」は9.0%であった。全体の51.9%は習い事をしていなかった。

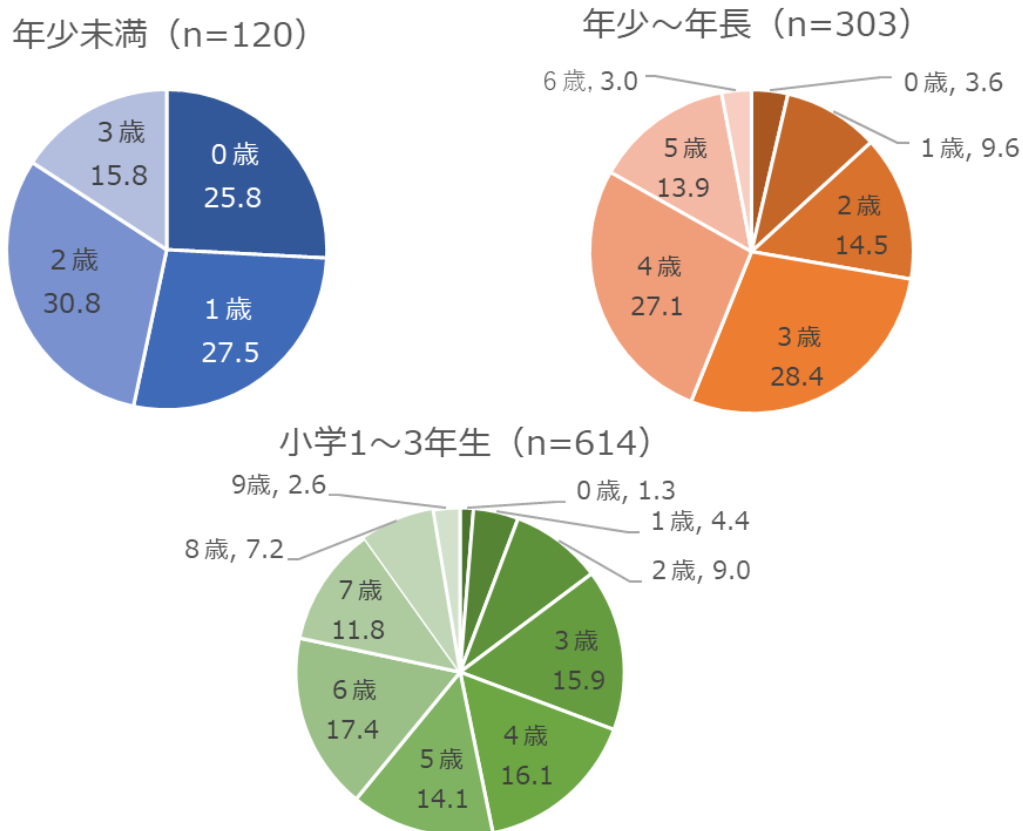
小学1～3年生について、その他を除いて上位に挙げた習い事は「水泳」(29.1%)、「ピアノ/エレクトーン」(16.6%)、「英会話(通学型)」(14.3%)であった。全体の30.4%は習い事をしていなかった。

年少未満については、年少未満を対象とした習い事が少ないため選択肢が限られており、通学型の習い事は水泳や英会話など一部に限られることが分かった。年少以降になると習い事の種類が広がり、水泳や体操などの運動系や、ピアノのような音楽系の習いごとが人気であった。英会話は、年少未満から始められる習い事の一つと言えるが、実施率は小学1～3年生においても14%程度に留まっており、人気の習いごとである水泳の半分以下という結果であった。

「子どもに通学型の英会話を習わせている」と回答した方に対し、何歳から英会話学習を開始したかについて聴取した。集計した結果を、図表2-3に示す。

年少～年長における英会話を習い始めた年齢は、3歳(28.4%)及び4歳(27.1%)の比率が高かった。小学1～3年生においては、3歳(15.8%)、4歳(16.1%)、5歳(14.1%)、6歳(17.4%)の比率が同程度で高かった。英会話は、子どもが小学校入学前(3～6歳)に開始するケースが多いことが分かった。

【図表2-3】子どもが英会話を習い始めた年齢(子どもの年齢区分別)



第3章 本調査（インタビュー調査）

調査手法

本調査における調査手法は、低年齢の子どもの英会話を習わせている生活者の意識、生活実態を探ることを目的として、1対1のインタビュー調査を採用した。インタビュー調査の概要を図表3-1に示す。

【図表3-1】 インタビュー調査の概要

項目	内容
日程	2019年2月2日（土）～2月5日（火）
対象者人数	9名
所要時間	1人あたり約1時間30分
会場	インタビュールーム

調査の対象者

インタビュー調査の対象者は、「低年齢の子どもの英会話を習わせている母親」とした。子どもが英会話学習を開始した年齢によって、親の意識や経験が異なると推測し、対象者を子どもの年齢毎に「年少未満」、「年少～年長」、「小学1～3年生」の3区分に分け、各区分3名ずつ計9名を招集した。また子どもの習い事に対する考え方やペインポイントは、母親の就労形態により異なるとも考え、子どもの年齢区分毎に、フルタイム勤務・パート勤務・専業主婦それぞれをなるべく含めるように調整した。

対象者選定にあたり設けた共通の条件を以下に示す。また、図表3-2にインタビュー調査対象者のプロフィールを示す。

<共通条件>

- 首都圏在住である
- 長子が0歳～9歳（小学校3年生）である
- 長子が直近1年以内に英会話学校に通い始め、現在も継続している
- 保護者の親世帯（子どもの祖父母世帯）から、家事・子育てに関する日常的な支援を受けていない

【図表3-2】 インタビュー対象者プロフィール

対象者	年齢	勤務形態	長子の 英語開始 年齢	分析の際の 年齢区分	同居家族（年齢）	居住地
A	27	フルタイム※育休中	0	年少未満	夫(31)、長男(0)	川崎市宮前区
B	32	専業主婦	2	年少未満	夫(34)、長女(3)	千葉県八千代市
C	34	パート	2	年少未満	夫(32)、長男(2)	浦安市富士見
D	40	専業主婦	3	年少～年長	夫(41)、長男(3)	川崎市麻生区
E	33	フルタイム	3	年少～年長	夫(42)、長男(3)	東京都墨田区
F	45	パート	5	年少～年長	夫(43)、長女(5)、長男(3)	横浜市鶴見区
G	37	専業主婦	7	小学1～3年	夫(37)、長女(7)、長男(3)	世田谷区桜上水
H	39	パート	7	小学1～3年	夫(40)、長男(7)	横浜市青葉区
I	45	フルタイム	7	小学1～3年	夫(45)、長女(7)	東京都目黒区

調査内容

インタビュー調査では、「子どもの英会話学習の実態」、及び「英会話学習を始めるまで（英会話学校検討・選定時）の話」を中心に聴取した。その他、調査対象者の人となり・背景を理解するために、生活全般や、教育観についても聴取した。主な聴取項目を図表3-3に示す。

【図表3-3】 インタビュー調査で聞き取りした主な内容

項目	質問内容
生活全般	<ul style="list-style-type: none"> ・平日・休日のスケジュール ・子どもの様子 ・自身の好きなこと、趣味
子どもの習い事全般	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに習わせている習い事の状況 ・習い事をさせる目的 ・習い事を継続する上でのペインポイント
子どもの英会話学習の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者のサポート状況 ・英会話学習の成果 ・英会話を継続する上でのペインポイント
英会話学習を始めるまで	<ul style="list-style-type: none"> ・英会話学習を検討し始めたきっかけ ・英会話学習のスクール選びの過程、選定基準 ・英会話学校選定時のペインポイント
子育て・教育観	<ul style="list-style-type: none"> ・英会話をいつまで習わせたいか ・子どもの進学先に対する考え方 ・どのような子どもに育てほしいか

子どもに英会話を習わせた理由

子どもに英会話を習わせた理由について、インタビュー調査にて明らかになった主な結果を以下(1)～(3)に示す。以降で引用する具体的な発言は、図表3-2で示した対象者名（A～I）を示す。

(1)英会話ができることは、これから生きていく上で必要なスキルだから

子どもの年齢に依らず、ほぼ全ての対象者は、英会話は今後役に立つスキルであると理解していた。『子ども達が社会人になる頃には、世界でやっていかないと生きていけないのではないか。そのために英語は必要(I)』、『これからは仕事だけでなく、日常生活でも英語ができた方がよい(C)』といった発言に見られる通り、グローバル化の進展を予感し、子どもが将来苦勞せず英会話ができるようになるために、今から準備をしていた。

(2)英語が得意になれば、学校の授業や大学受験において有利だから

特に3歳以上の子どもを持つ対象者は、新教育指導要領の開始により、小学校から英語の授業が始まることを認知していた。『小学生で英語の授業が始まって、子どもに全く英語をやらせていなかったことを後悔している人の話を聞いた。逆に小さい頃から英語をやっている子は学校の授業は簡単にできて、他の勉強に時間を費やすことができるので良いという話を聞いた(D)』というように、小学校の英語の授業に楽についていけるように準備することが英会話を習わせる目的になっていた。また、『子どもが大学受験をする時には、英語の四技能が問われるから、英語力は更に必要になる(H)』と、大学入試における英語の評価方法が変更されることに関して言及した方が1名あった。

(3)小さいうちから始めれば「英語耳」や「正しい発音」が身につくから

特に0-2歳の子どもの子どもを持つ対象者は、小さな頃から子どもに英会話を習わせることで、子どもが楽に英語を聞き取れる(『小さいころからやっておけば、耳が慣れる(A)』)ようになることを期待していた。また『英語の抑揚が身につくのは6歳までだと聞いた(C)』というように、子どもが正しい発音で英語を話せるようになることも期待していた。

英会話を始める際のプラス要因とマイナス要因

英会話に関心を持ち、習い始めることを検討する段階に進んだ際、どのようなことが英会話学習開始におけるプラス要因になり、反対にマイナス要因になるのだろうか。インタビュー調査で明らかになった主な内容を、図表3-4に示す。

【図表3-4】英会話を始める際のプラス要因・マイナス要因

区分	内容
プラス要因	立地がよい(通しやすい)
	授業の曜日・時間の都合がよい
	外国人講師がいる
	(体験授業に)子どもが楽しく参加できた
マイナス要因	授業の内容が子どものレベルに合っていない
	ホームページに知りたい情報が掲載されていない
	候補のリストアップに時間がかかる
	口コミ情報が少ない

(1) プラス要因

対象者にとって、英語を習い始める上で必須となる条件は、「立地がよい（通いやすい）」ことと、「授業の曜日・時間の都合がよい」ことの2点であった。具体的な発言として『今の英会話学校は学童から近いので、子ども自身で学童から直接行ける(I)』、『他に金曜日に行けるところもなかったので、今の英会話学校に決めた(H)』等があった。

上記の他に「外国人講師がいる」ということが、英会話学習開始・学校選び決め手になっている場合もあった。対象者が、外国人講師の指導の下、英語を習わせたいと考えた理由は主に2つあった。1点目は『ネイティブの人の英語に触れてほしい、耳が慣れてほしい(C)』というように、ネイティブスピーカーの英語に触れることが、子どもの英会話学習に役立つと考えているためだった。2点目は『外国の人と触れさせたい(D)』というように、外国人とのコミュニケーションそのものに、早いうちから慣れることに価値を感じているためであった。

また、英会話の体験授業などで『子どもが楽しそうだったから、決めた(B)』と、「子どもが楽しく参加できた」様子を確認できた事も、英会話を習い始める決断を後押ししていた。反対に、『体験授業で、子どもがあまりにも興味がなく、グズグズしており、とても続けられる感じがしなかったので、その学校は見送った(D)』という発言の通り、体験授業の内容と子どもの様子を見て、英会話学校への入会を見送るケースがあった。

さらに、『短時間で教える内容が切り替わるので、子どもが飽きなさそう(C)』『会話だけでなく、文法も教えてくれるので丁度よい(H)』といったように、「授業の内容が子どものレベルに合っている」ことも、英会話を習い始める決め手の一つとなっていた。一方で、『ネイティブ講師がいない(C)』といった講師に関する希望との不一致や、『検討した英会話学校の授業は、読み書きがなかったため、他の英会話学校を探した(H)』といった授業内容に関する希望との不一致がある場合は、その英会話学校への入学を諦めていた。

(2) マイナス要因

上記で述べた通り、英語を習い始める上で必須となる条件の一つは、「授業の曜日・時間の都合がよい」ことであった。しかしながら、英会話学校のホームページには、利用可能な曜日・時間が明記されていない場合もあるようだった。同様に、入学金や教材費を含めた諸経費についても、電話で問い合わせたり、体験レッスンに参加したりすることで初めて明らかになるケースもあるようだった。具体的には『今入れるコマはどこで、空き人数はどうなのかなど、電話で問い合わせないと分からなかった(E)』、『入学金や月謝、最低何ヶ月続けなければいけないのか等、事前に知りたかった事は問い合わせないと分からなかった。ホームページに書いてあればよかったのに(A)』等の発言があった。

通学できる曜日・時間や、支払える授業料は、生活者それぞれに制約がある場合が多い。生活者が、いずれの英会話学校に子どもを通学させるかを検討するにあたり、自身の求める条件に合わない英会話学校は候補から外す必要があるが、「ホーム

ページに知りたい情報が掲載されていない」ため、各英会話学校に問い合わせをする手間が発生しており、生活者の英会話開始の検討におけるマイナス要因になっていた。Web検索で知りたい情報が集まらないため、「英会話学校の候補のピックアップに時間がかかる」という不便さも生じていた。

また、インターネット上の口コミ情報は、英会話学校を選定する上で重要な評価指標となり得る。対象者からは、検討中の英会話学校に関する口コミ情報が少ないことが不満として挙げられた。具体的には、『見学に行く前に、ネットで利用者の声を確認できればよかった。先生の評判、授業の雰囲気などが分かれば、もっと簡単に候補が絞り込めた(E)』、『英会話学校の公式ホームページで紹介されている利用者の声は、だいたい「よかったです」というものばかりで参考にならない。口コミサイトなどで利用者の口コミが確認できればよかった(D)』等の声が挙げられた。

上記のような不便さが解消されれば、生活者がスムーズに子どもの英会話学習を開始できるようになると考えられる。

英会話を継続する上でのペインポイント

子どもが英会話を習い始めた後、英会話学習を継続する上では、どのようなペインポイントがあるだろうか。インタビュー調査を通じて、子どもの年齢に依らず発生するペインポイント、子どもの年齢に依り発生するペインポイントのそれぞれが抽出された（図表3-5）。

【図表3-5】 習い事としての英会話を継続する上でのペインポイント（子の年齢区分別）

年齢区分	内容
全年齢	英会話学校までの送迎は親に負担がかかる
全年齢	英会話学習の成果・効果を、親が感じにくい
全年齢	（時間がない・負担が大きい等により）親が家庭で十分なサポートを行えない
全年齢	（親の能力が足りないため）親が家庭で十分なサポートを行えない
年少未満	子どもの生活リズムと授業の時間が合わない
年少未満	親も一緒に受講しなければいけないことが負担
年少～年長	英会話の講師（特に男性講師、外国人講師）に子どもが慣れない・怖がる
年少～年長	子どもが恥ずかしがって英語を喋らない
小学1～3年	開始年齢によるレベルの差が大きくなり、子ども自身が引け目を感じる
小学1～3年	放課後の授業は子どもが疲れる

(1)子どもの年齢に依らず共通するペインポイント

英会話学校までの送迎に関し、各年齢の子どもを持つ対象者から不満の声が上がった。『車で送迎しなければならず、面倒(H)』『冬に自転車で送り迎えをするのは大変。雨が降ってもきつい(C)』といった発言にある通り、一人で通学するには子どもが小さすぎる場合、または自宅から英会話学校まで距離がある場合、対象者にとって「英会話学校までの送迎が負担」になっていた。

「英会話学習の成果・効果を親が感じにくい」ことも、各年齢の子どもを持つ対象者からペインポイントとして挙げられた。『まだ目に見える成果というものがない。子どもが大きくなり、英検に受かったとか、英語の試験で楽に点数が取れたとかであれば、英会話を習っていて良かったなと思うだろうが(D)』との発言にある通り、低年齢の子どもの英会話学習の成果はテストの点数などで可視化することが難しいため、英会話学習の効果があるのかどうか、不安を覚えるようであった。

さらに、英会話学習について「親が家庭で十分なサポートを行えない」ことも、対象者にとってペインポイントになっていた。このペインポイントの発生理由は二つあった。一つ目は、「時間がない・負担が大きい」ため、家庭での英会話学習のサポートが対象者にとって負担になっていることであった。具体的には『2~3カ月に1回英語劇の発表会がある。子どもに台詞を覚えさせ、練習させなければならないことが負担になっている(H)』といった発言があった。二つ目の理由は、英会話に関する「親の能力が足りない」ことであった。『私も主人も正しい英語の発音ができない。毎回宿題が出るが、せっかく外国人の先生のきれいな発音を教えてもらっているので、それを崩したくないから、親は横で見ているしかない(F)』と、親がネイティブスピーカーのような発音ができないため、家庭でのサポートができないことに悩んでいた。

(2)年少未満に共通するペインポイント

年少未満の子どもは、昼寝の時間や食事のタイミングなど、各個人に適切な生活リズムがそれぞれ異なる。しかし英会話の授業の時間は英会話学校により決められており、生活者はその授業時間に自らの生活を合わせなければいけない。「子どもの生活リズムと授業の時間が合わない」ことが、年少未満の子どもを持つ対象者に共通して見られるペインポイントであった。『授業前に子どものお昼寝が上手くできないと、子どもが授業中に愚図ったり、寝たりしてしまうことがある。1時間の授業中全部寝ていることもあった(C)』等の発言が見られた。

また、子どもが3歳頃までは親も一緒に英会話の授業に参加するケースが多い。授業の内容や子どもの様子が分かるため、親が安心できる反面、『私(母親)も一緒にやらないといけないのはきつい(B)』のように、「親も一緒に受講しなければいけないことが負担」にもなっていた。

(3)年少~年長に共通するペインポイント

年少~年長の子どもは、徐々に周りのことが理解できるようになり、また自己主張もするようになる。『子どもが「怖そうだから、男の先生は嫌だ」と言った(F)』の発言にある通り、「英会話の講師(特に男性講師、外国人講師)に子どもが慣れない・怖がる」ため、受講に支障が出るケースがあった。

また、子どもが英会話そのものやクラスの雰囲気慣れるまでに時間がかかるケースもあった。『始めた頃は授業中やたらと恥ずかしがり全然喋らなかつたりしたので、英会話学校を辞めようと思っていたこともある(E)』との発言に見られるように、人前で英語を話すことに子どもが抵抗感を感じ「子どもが恥ずかしがって英語を喋らない」場合は、親が英会話を継続させるべきかどうか戸惑うようであった。

(4)小学1～3年に共通するペインポイント

子どもが小学生以上になると、主に英会話学習の開始年齢の違いにより、子どもの間で英会話の習得レベルの差が開いてくる。そのレベルの差について、「子ども自身が引け目を感じる」事が英会話学習継続のペインポイントになっていた。子どもが小学生になってから英会話を始めた対象者(I)は、就学前から英語を習っている子どもに混ざって授業を受けた際の子どもの状況について、『「先生も子どもも、英語だけを喋っていて、自分だけは何を言っているか分からない、自分はできない」という感じになってしまった』と発言していた。子どもが自信を喪失し、英会話学習継続の意思を失うことは、英会話学習継続の上で重大なペインポイントと言える。

また、小学生は学校生活と習い事の両立が必要となる。放課後に英会話の習い事を実施する場合『小学1年生だとまだ辛そう。子どもは学校が終わると疲れてしまっているのでは(G)』との発言にある通り、「放課後の授業は子どもが疲れる」ことが、英会話学習継続のペインポイントになっていた。

(5)親が就労している場合に共通するペインポイント

子どもの英会話学習を継続させる上でのペインポイントについて、自身がパートまたはフルタイム勤務をしている対象者に共通したペインポイントも発見された。具体的には、「親の就労と、英会話学習の両立が難しい」ということである。『仕事の都合で習い事ができる曜日と時間が限られる。他の習い事もしていると、スケジュールの調整が大変(H)』というように、親の就労時間の都合により、子どもに習い事をさせられる曜日・時間に制約があることがペインポイントとなっていた。また親自身の就労と関わりがあるペインポイントとして『学童は16時半までに帰ると減点になり、翌年度に学童に入れなくなる可能性がある。習い事は16時半以降に通わせなければいけない(I)』との発言に見られる通り、子どもの学童継続条件を満たすために習い事の実施時間に制約が生まれるケースもあった。

いつまで子どもに英会話を習わせたいか

子どもの年齢が上がるにつれ、子どもや親自身を取り巻く環境は変化する。そのような環境変化を鑑みた上でいつ頃まで子どもに英会話を習わせたいかについても、インタビュー調査にて聴取した。

(1)ずっと習わせ続けたい

対象者のうち5名は、英会話を「ずっと習わせ続けたい」と回答した。これらの対象者は、『子どもはすぐ忘れるから、継続したほうがよいと思う(A)』というように、英会話学習は継続することが必要だと認識していた。

また彼らは、子どもの年齢が上がるにつれて、現在の英会話学習を継続させることが適切ではなくなるとも考えていた。対象者(H)は『中学以降は、文法がセットになっている授業の方が良いと思っている』と発言し、英会話学習の内容を見直す検討をしている。また子どもの中学校受験を視野に入れている対象者(G)は『塾に行くようになったら、英会話学校に通えなくなる。スカイプなどのオンライン学習に変

えるかもしれない』と発言しており、通学型以外の方法で英会話学習を継続することを検討していた。

(2) 小学校卒業まで / (中学校の) 受験勉強を始めるまで

対象者のうち3名は、学業や受験勉強などと英会話学習の両立が困難になった場合、英会話学習を中断することを想定していた。対象者(I)は『なるべく続けた方がよいとは思いますが、中学受験の妨げになるならやめるかもしれない』と発言しており、受験勉強を優先するために英会話を中断することを検討していた。また対象者(D)は『中高生で英会話に通っている子を見たことがないので、小学校まででよいのかなと思っている』とも発言しており、中高生の習い事としての英会話のイメージが湧かないようであった。

尚、対象者1名は、いつまで子どもに英会話を習わせるかについて『今は判断できない』と発言していた。

第4章 考察

調査結果サマリー

Webアンケート調査、インタビュー調査により明らかになったことを以下に述べる。

- **子どもの習い事としての英会話のシェア**

Webアンケート調査の結果によると、「低年齢の子どもに英会話を習わせている」比率は、「小学1～3年」においても14%程度であった。人気の水泳(約29%)等と比べると、習い事としてのシェアは高いとは言えない。

- **英会話を習い始める年齢**

Webアンケート調査の結果によると、「子どもが年少～年長の時に英会話学習を開始させる」比率が高かった。

- **子どもに英会話を習わせた理由**

低年齢の子どもがいる対象者が子どもに英会話を習わせた理由は、「英会話ができることは、これから生きていく上で必要なスキル」であり、「英語が得意になれば、学校の授業や大学受験において有利」であるとの考えからであった。また子どもに英会話を習わせる場合は「小さいうちから始めれば『英語耳』『正しい発音』が身につく」との考えに基づき、子どもが小さいうちから英会話を始めることが適切であると考えていた。

- **英会話を始める際のプラス要因とマイナス要因**

対象者が子どもに英会話を習わせる検討を行う際、英会話学習の開始を促進するプラス要因は主に、「英会話学校の立地がよいこと」、「授業の曜日・時間の都合がよいこと」、「外国人講師がいること」、「(体験授業に)子どもが楽しく参加できたこと」、「授業の内容が子どものレベルに合っている」ことであった。反対に、英会話学習開始時のマイナス要因は主に、「ホームページに知りたい情報が掲載されていない」、「英会話学校の候補のリストアップに時間がかかる」、「口コミ情報が少ない」ことであった。

- **英会話を継続する上でのペインポイント**

対象者の子どもが英会話学習を継続する上のペインポイントについて、子どもの年齢に依らず発生するもの、子どもの年齢に依り発生するものの双方があることが確認できた。子どもの年齢に依らず発生するペインポイントには、「英会話学校までの送迎」、「授業の成果・効果を感じにくいこと」、「(時間的理由／親の能力不足により)家庭で十分なサポートを行えないこと」があった。子どもが年少未満の対象者におけるペインポイントは主に「子どもの生活リズムと授業の時間が合わないこと」、「親も一緒に受講しなければいけないこと」であった。子どもが年少～年中の対象者におけるペインポイントは主に「英会話の講師(特に男性講師、外国人講師)に子どもが慣れない・怖がること」、「子どもが恥ずかしがって英語を喋らないこと」であった。子どもが小学1～3年の対象者におけるペインポイントは主に「英語学習の開始年齢に依るレベルの差が大きくなり、子ども自身が引け目を感じること」、「放課後の授業は子どもが疲れること」であった。さらに、親が就労している場合に共通したペインポイントとして「親の就労と、英会話学習の両立が困難」であることが挙げられた。

- **いつまで英会話を習わせたいか**

対象者が、子供にいつまで英会話を習わせたいかについては、「ずっと続けさせたい」と考える対象者がいる一方、学業や受験勉強との両立を鑑み「小学校卒業まで／(中学校の)受験勉強を始めるまで」に中止せざるを得ないと考えている対象者もいた。

起こり得る環境変化

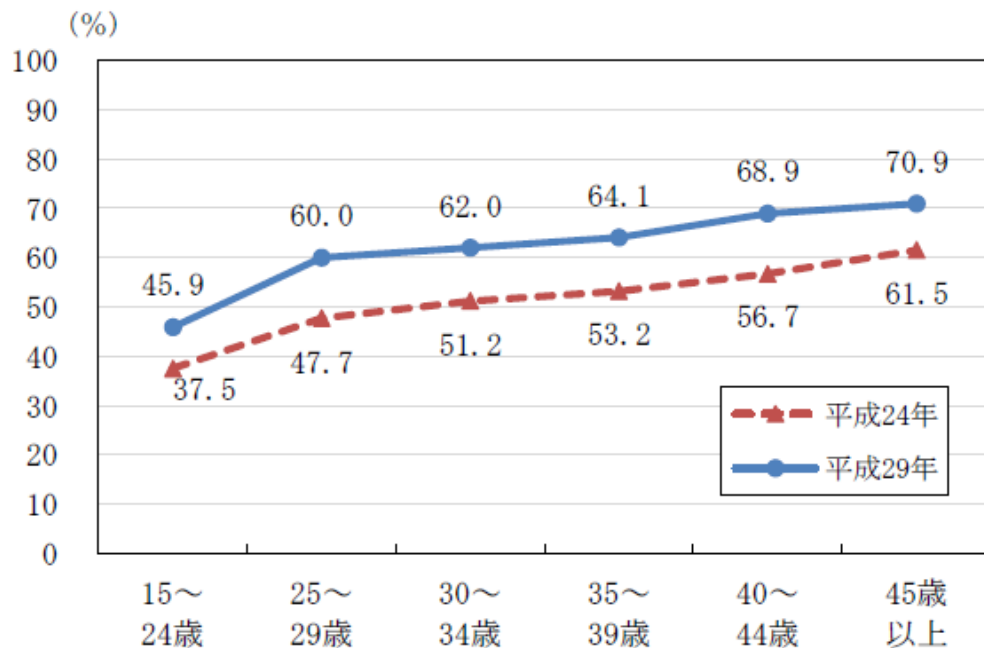
本調査の目的である、習い事としての子どもの英会話学習に関する促進と継続を支援する方法を検討する上で、生活者を取り巻く今後の環境変化について考察した。

(1)共働き家庭が増加する

起こり得る環境変化の1つ目は、共働き家庭が増加するであろうということである。総務省「2017年就業構造基本調査」によると、共働き世帯の比率は、2012年には45.4%

であったところ、2017年には48.8%¹に増加した。また同調査結果における、育児をしている女性の有業率²は、2012年調査時と比べると全ての年齢階級において比率が上昇していた（図表4-1）。

【図表4-1】年齢階級別育児をしている女性の有業率



（出典：総務省「就業構造基本調査（2017年）」）

共働き家庭の増加傾向は、今後も継続すると考えられる。今回調査で明らかになった、親が就労をしている場合に共通して発生するペインポイント（親の就労と、子どもの習い事の両立は困難）を経験する生活者が増加することが予想される。

（2）新学習指導要領への理解が浸透する

1章で述べた通り、新学習指導要領の開始に伴い、小・中・高等学校における英語教育や、大学入試における英語の評価方法は変化する。調査対象者に対し、新学習指導要領に関する認知を確認したところ、全員が「聞いたことがある」と回答している。一方、その内容に関する理解度には個人差があり、対象者の中で最も内容を理解していると思われる対象者(H)に関しても「大学受験で英語の試験が四技能になる」ということを知っている程度であった（図表4-2）。

¹ 「夫婦のみの世帯」、「夫婦と親から成る世帯」、「夫婦と子供から成る世帯」及び「夫婦、子供と親から成る世帯」（全国で2763万5千世帯）のうち、夫婦共に有業の世帯の比率

² 「育児をしている」とは、小学校入学前の未就学児を対象とした育児をいい、孫やおい・めい、弟妹の世話などは含まない。

【図表4-2】新学習指導要領に関する発言

対象者	新学習指導要領に関する発言
A	小学校から英語があるということは、友達が小学校の先生が多いので知っていた。
B	小学校から英語が始まるから、早めに英会話を始めたほうがいい、と地元の友達が言っていた。
C	英語は、小学校くらいから必須になったと聞いている。
D	小学生から英語の授業が始まると、ニュースで聞いたことがある。
E	ニュースで、小学校低学年、中学年でも英語が徐々に始まると聞いた。
F	よくは知らないが、小学校3年生から英語が始まることは上の子がいるママ友から聞いた。
G	英語が小学校の授業に入ってくる。中学受験の入試科目にも英語が入ると思う。
H	子どもが大学受験をする時には、英語の試験が4技能になる。
I	センター試験が無くなることは知っているが、新しい試験の内容は定かではない。

小さな子どもを持つ生活者は、新学習指導要領が開始されることを知ってはいるものの、内容まで理解している方は現状は少ないと推測される。新学習指導要領に関する認知・理解が広まることで、学校の授業や入学試験で苦勞をしないで済むように、子どもが低年齢のうちに英語を習わせ始めた方がよいと考える生活者が増えると考えられる。

(3)英会話の習得が、生きていく上でより重要になる

これまでは、日本人の多くは、日本に暮らし、日本の企業で働いている限り、英会話ができなくても大きな問題はなかった。しかしながら、2018年の訪日外国人客数が過去最高である約3,120万人¹に達し、日本で雇用される外国人労働者数が前年同期比14.2%増の約146万人²であるという現状を踏まえると、日本で暮らす上でも、英語を話す機会は増加すると考えられる。また国内人口の減少により、国内における消費需要の縮小は避けられず、海外に活路を見出す企業がますます増えることも想定される。ビジネスにおいても、英会話の必要性はますます高まると考えられる。インタビュー調査対象者も『子ども達が社会人になる頃には、世界でやっていけないと生きていけないのではないか。そのために英語は必要 (I)』、『これからは仕事だけでなく、日常生活でも英語ができた方がよい(C)』と発言しており、この点については理解が浸透している。

子どもの英会話学習を促進・継続させるために必要なサポート

英会話学習の開始を促し、学習を継続できるようにするために、インタビュー調査の対象者が抱えていたペインポイントを解消する方法を検討した。

¹ 日本政府観光局 (JNTO)

https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/190116_monthly.pdf

² 厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_03337.html

(1)送迎負荷の軽減・解消

子どもの年齢にかかわらず、対象者が共通して抱えていたペインポイントの一つは、英会話学校までの送迎であった。子どもにとって安全と言える状態で、親が手をかけずに、習い事への送迎を実施する方法について、韓国の例を挙げたい。教育熱心で、子どもに複数の習い事をさせる家庭が多い韓国では、習い事教室毎にスクールバスが運行されており、小学校から習い事教室までの子どもの送迎を行っている。日本でも、一部のスイミングスクールなどがスクールバスを運行しているが、実施率が高いとは言えない。日本においても韓国と同じ様に習い事教室のスクールバスが充実すれば、親の送迎負担は解消される。習い事教室によっては生徒数が少なく、教室毎にスクールバスを運行させることが難しいという事情もあるだろうが、そのような場合は同じ地域内にある複数の習い事教室が共同で一つのバスをシェアするという方法も考えられそうだ。また韓国において、同じ建物の中に複数の習い事の教室が入居し、子どもが建物内を行き来するだけで複数の習い事に通えるという事例もある。子どもが習い事教室に移動する時間が短縮されれば、同じ日にもう一つ習い事を増やすことができる可能性もあり、生活者にとっても、生徒を獲得したい習い事教室にとっても、複数の習い事教室を同じビル内に設置することは有益であると考えられる。

(2)成果の見える化

対象者が共通して抱えていたペインポイントとして、「授業の成果・効果を感じにくいこと」も挙げられた。何らかの形で英会話学習の成果が見える化できれば、子どもに英会話を習わせている親の不安も少しは解消されるのではないだろうか。また英会話学習における成長実感は、子ども自身のモチベーション維持にも繋がると考えられる。例えば、スイミングスクールのように、進級基準を明示し、現在どのランクに到達しているのかを示すことも有効と言えそうだ。昨今では、英会話スキルをAI（人工知能）が採点するサービスが登場し、英検におけるスピーキングの採点も2019年から順次AIによる採点に置き換わる¹。このような技術を応用し、子どもの発育段階に沿って英会話学習の到達度を示してくれるサービスがあるとよい。

(3)家庭学習のサポート

「(時間的理由/親の能力不足により)家庭で十分なサポートを行えないこと」も、対象者から挙げられたペインポイントであった。親がなるべく手間をかけることなく、子どもが英会話の家庭学習を行えるようにするためのサポートが必要と言える。既に一部の英会話学校では、英会話や英語の歌が聞けるCDや、テキストをなぞると英語を読み上げるタッチペンなど、親が子どもに付ききりにならずとも子どもが英会話学習を行える教材を提供している²。このような教材に加え、タブレットやパソコンを使って英語を学習するオンライン学習の仕組みや、楽しい映像コンテンツ、

¹ 日本英語検定協会

https://www.eiken.or.jp/eiken/info/2018/pdf/20181017_pressrelease_aisaiten.pdf

² イーオンキッズ https://www.aeonet.co.jp/kids/age4_5/text.html

学習支援アプリが充実すれば、子どもの集中力ややる気が引き出され、より自律的に家庭学習を行えるようになるのではないだろうか。

(4)英会話学習時間と、子どもの預かりの両立

就労している対象者からは、「親の就労と、英会話学習の両立」が困難であるとの声が挙げられた。前節で述べた通り、育児をしながら働く生活者はこれからますます増えることが予想されるため、このペインポイントの解消は重要であると言える。低年齢の子どものは、親が仕事をしている間、幼稚園や保育園、学童など、子どもの預かりを行う場所で過ごしている事が多い。これらの子どもの預かりの場所と、英会話学校が両立すれば、就労している生活者のペインポイントは解消されるのではないだろうか。一部の英会話学校では、学童機能を備え、小学校の放課後に子どもの預かりサービスを提供している。このように長時間預かりを行う英会話学校が増えることが望まれる。また、幼稚園や保育園、学童など既にある子どもの預かりを行う場所で、英会話学校が出張授業を行い、希望する子どもが英会話を学べる環境が整うことも、就労している生活者のペインポイント解消に有効であろう。

【執筆者プロフィール】

氏名： 宮脇 景子

所属： 株式会社KDDI総合研究所 フューチャーデザイン1部門 アナリスト

経歴： KDDI株式会社に入社後、2010年株式会社KDDI総研に出向し、通信市場や生活者に関する調査研究に従事。2016年のKDDI総合研究所発足に伴い、現職に至る。